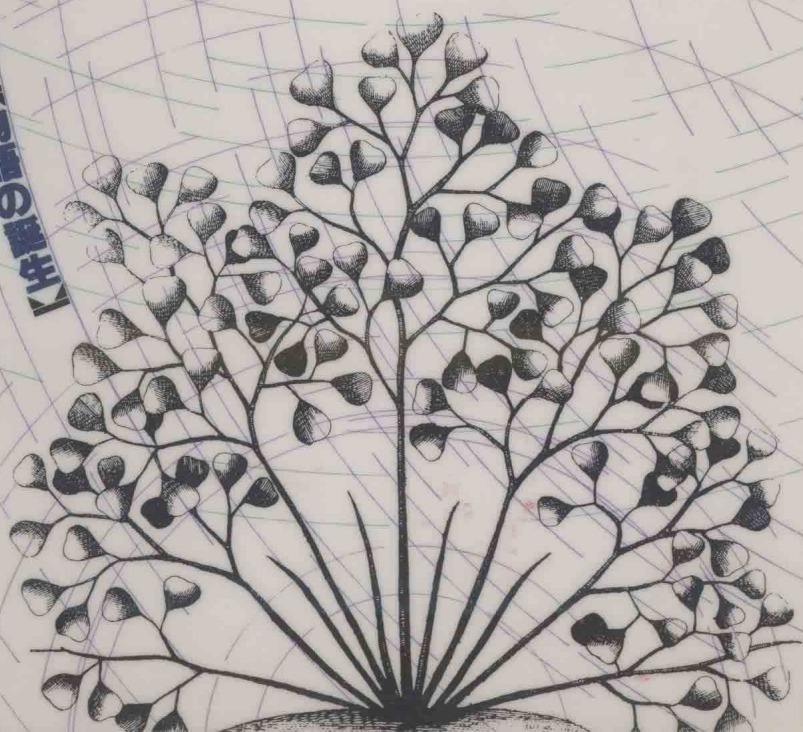


富岡多恵子

水 上 庭 園

シリーズ「物語の誕生」



富岡多恵子

園庭上水

シリーズ「物語の誕生」

岩波書店

水上庭園

シリーズ〈物語の誕生〉

1991年10月8日 第1刷発行 ©

定価 1600 円
(本体 1553 円)

著 者 富岡多恵子

発行者 安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩波書店
電話 03-3265-4111(案内)

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004151-7

水上庭園

一九八八年 東京

一九八八年五月中旬、東京新宿局のスタンプがはつきり読みとれるEからの葉書が舞いこみま
した。

「突然の連絡にきつと驚いているでしょう。今、東京にいるんですよ。もし時間があれば、ど
こかで会って喋れたらと思います。あなたの電話番号がわからないのでそちらからかけてほしい
のですが。滞在している×××ハウスの電話番号は〇〇〇です。アメリカでもバンコクでもドイ
ツでも会わなかったので、東京ではぜひ会いたいと思います」

五月某日、Eが場所を知っているという新宿の××ホテルのフロント前で待ち合わせる約束を
しました。ロビーではなく、フロントの前とわたしがわざわざ指定したのは、ひとの多いロビー
でEを即座に見つけられるかどうか不安だったからです。葉書を手にした時から「興奮」してい

ましたので、ささいなことにも不安が不安を呼ぶのでした。

それで滑稽ですが、その日用事で会った友人に待ち合わせの場所へ「付き添って」いつてくれるよう頼みました。自分ひとりでEとの再会劇を演じるのが不安でした。約束の時間に、セロファンで巻いた薄紅色のバラを一輪手にした外国人がきました。その時、バラの花をもっていないければ、その外国人をEだと即座に感じたかどうか自信がありません。まずバラの花が目に入りました。それでその男がEだとわかったのです。男が十八年ぶりに女に会うのにヨーロッパ人ならバラの花をもっている、とその瞬間に決めてしまったのでしよう。わたしは思わずEの名前を呼んでいました。

しかしもう次の瞬間、まるでしばらく会わなかった友人同士のように、Eとわたしは静かに並んで歩きだしていました。再会劇の証人役を頼まれた友人は、感激の叫びも抱擁もないのでがっかりしたと、すぐに帰っていましたが、わたし本人もあっけなくて拍子抜けしたのでした。

だからといって、わたしの「興奮」がおさまったわけではありません。普段なら、高すぎると憤慨して利用しないそのホテルの中華料理店に、Eをともなって入っていったのですから。

「一九七〇年の夏だったから、すると——」というわたしに、「三十九歳——」とEは笑いしました。年齢をたずねたつもりではなかったのに、Eは三十九歳といったのです。もちろん前に坐っ

ているのは、二十一歳のあの時の青年Eではありません。頬がこけて、痩せています。それに、あの時とちがうのは口髭をはやしていることです。金色がかった薄茶色の髪は思いなしか前より量が減ったように見えます。

わたしもEも、ぎこちない喋り方で、ぼつりぼつりとしか言葉が出てきません。ことにわたしは普段の生活で英語を喋る必要がほとんどなく、いつも使っているわけではありませんから、Eと面と向かっているというテレビと重なって、もどかしくも急には英語が流れ出てくれないのです。Eも緊張しているらしいのは、食べるものの量が少ないことでわかります。テーブルの上に積んである白い小皿に、料理が運ばれてくるたびに、わたしはとり分けてEの前におくのですが、それが減っていきません。このひとが、あのシベリア鉄道の列車食堂では、わたしの残した黒パンやゆで卵を自分のコンパートメントにもって帰ったこともあるのですから、あの食欲は若さのせいだったのでしょうか。

わたしの口から出てくるのは紋切型な質問の英語ばかりで、なにげないオシャレなお喋りなんてとうていできません。喋り出すとEの英語は十八年前よりはるかに上手になっています。多分アメリカ体験のせいだと思います。

その日、Eの話でわかったことは、教師をしていたタイのバンコクから、契約が切れたので日

本に教師の口を求めてやってきたのだということでした。はにかみの強いEは、自分からにぎやかに喋りまくるようなことはしません。それに、煙草は以前と同様にかなり喫いますが、アルコール飲料は飲みませんから、ビールがまわってきて冗談が出てくるというようなことが、彼には起らないのです。

それでわたしは、Eのお喋りをひき出すべく、わざと無遠慮にいました。

「タイで、エマニュエル夫人に出会ったんじゃない？」

するとEは、「ノオノオ」と、とんでもないという調子で答えましたが、その「ノオノオ」といういい方、独特の抑揚は十八年前と変わっていませんでした。アメリカ人やイギリス人のノオではなく、ドイツ人のノー、いや、やはりE独特のノオのような気がします。モスクワに着く前日、列車の食堂で外国人だけのサヨナラ・パーティーがあったのですが、その時同じテーブルにいたEに、「モスクワ駅に着いたら、映画の別れのシーンのようにアンブラセしてね、握手だけじゃだめよ」とわたしが冗談をいいますと、「ノオノオ、アイムシャーイ」といった時の、少々間のびした抑揚と同じです。

十八年間、Eはなにをしていたのでしょうか。わたしが手紙で知っているのは、Eが大学に入る前までです。手紙に書いていたように、やはりテュービンゲン大学に入学したのかとたずねます

と、「ベルリン自由大学に六年いた」と笑いましたが、なぜテュービンゲン大学にはいかなかったか、というようなことはなにもいいません。たしか手紙では、テュービンゲンという大学町はヘルマン・ヘッセにゆかりがあり、その大学で哲学と文学を勉強したいと書いていたのです。

Eは今回、職さがしのために日本にやってきたのです。「日本にいけば、外国語の教師の口を見つけるのはそんなにむつかしくない」と聞いていたからだというのですが、東京で大学の語学教師の口が簡単に見つかるものでしょうか。しかも彼が教えるのは、日本の学生にあまり人気のないドイツ語です。

その時Eが泊まっていた×××ハウスはどんなところかとたずねますと、なんと一泊千四百円だということです。都心のホテルの十分の一です。どうやら、日本にくる外国人学生や旅行者の一部の間では知られている安い宿屋らしく、それでも高いと、さらに安いユースホステルに頼んであるというのでした。おそらくタイからきたEにとって、東京の物価は想像以上の高さだったようです。わたしはEに同情しましたが、彼の日本に対する認識が甘かったのではないかと、ひそかに思うのでした。Eは十八年ぶりに日本に戻ってきた浦島太郎だったのですから。

旅人が旅のあとの物語を詮索しあうのは野暮ですが、わたしは「その後のE」を知りたくてうずうずしています。「家族は？」と聞いてしまいました。「結婚していない」というEに、「ふと

っておなかの出たあなたの横に、とてもふとった奥さんがいて、元気そうな子供がゾロゾロ並んでいたら、見分けがつくかどうか心配で、それでこの間電話で、ふとっているか痩せているかって聞いたのよ。そしたら前より痩せているから、見まちがうかもしれないっていったでしょ。ほんとに見まちがえそうだった。どうしてそんなにふとらないの？」とわたしはわけのわからないことをいいましたが、それは以前にEがわたしにいったことを覚えていたからです。列車食堂で、「ドイツでは女のひとは三十過ぎるとたいていすごくふとる。だからあなたはきつと二十二か三くらいだ」と、その時三十四歳だったわたしを、痩せっぱちだということで自分と同世代だと決めたしまったのです。

その日、夕方から用事のあったわたしは、三日後にEと会う約束をして帰りました。そしてその日の夜から、十八年前のEの手紙をとり出して日付の順に読みはじめました。



七〇・九・二二　　ビーレフェルト

シカゴからの絵はがき、とてもうれしく受けとりました。旅はどうでしたか。きつと、いろいろのものを見たでしょうね。でもアメリカはそんなにおもしろくなかったんじゃないですか。

といっても、ぼくはまだアメリカに行ったことはないからよくわからないけれど、多分好きになれない気がします。

あの時、モスクワには三時間もいないで、すぐベルリン行きに乗せられたんですよ。モスクワでいっしょに過ごせなかったのはとても残念です。あのまま旅を続けたかった。ベルリン行きの列車のコンバートメントではずっとひとりきりでした。

ところで、一年間の旅行のあと、僕の生活はまったく変わってしまいました。どういったらいんでしょう、また元通りの、いわばノーマルな毎日になったわけですが、前より悪くなったともいえます。というのは、すでに十八カ月の兵役アーミー・サービス義務の命令がきていて、十月のはじめから、いやでもそれに従わなければなりません。本当にうんざりです。

去年の夏から一年間アジアを旅行して、東アジア、ことに日本が好きだとわかりました。日本で見えたものや、会ったひとのことを思い出すと、とても楽しくなります。でもそれより、あなたにもう一度会いたいと思います。いつかそんなチャンスがあるといいのですが。あなたのことや日本のことを知りたいです。手紙を下さい。

毎日あなたからの手紙を待っていました。先週の日曜日に受けとった時はとてもうれしかった。旅行中のスナップ写真どうもありがとう。何度も何度も眺めています。

前の手紙でも書いたように、十月のはじめから軍隊におります。生活はすっかり変わってしまいました。もうなにも自由はありません。朝は六時十五分起床で、それから夜十時就寝まで、じつにたくさんの無意味な仕事をしなければなりません。しかも、すごくキツイ。新兵というのは、それはひどい扱いを受けるのです。ボスは、自分の望むことはなんでも命令できますし、どのような命令でもわれわれはそれに従わねばなりません。われわれは人間ではなく、たんなる番号に過ぎません。かれらは辛うじてわれわれの名前を呼んではいますが。

自由な時間がなく、ウィーク・エンドの一日に、ほんの二時間か三時間与えられるのが唯一の休息です。それで、なかなか返事が書けませんでした。許してください。

ここへきて、軍隊の連中の、ひとを殺すことに関する意見というのはおそろべきものだとはじめて知りました。ことにひどいのはアジア人に対してで、まるで動物が殺されてもたいしたことはないという感じで話しているのです。ぼくは、神経がつぶれそうで、叫び出しそうでした。

いつか話したと思いますが、西ドイツでは兵役義務を拒否することができます。ひとを殺すこ

とが、その人間の良心に反するならば。とはいっても、その理由を軍事法廷で証言し、それが認められてのことです。良心的兵役拒否^{*}が認められると、軍隊には行かなくていいのですが、兵役義務^{アーミィ・サービス}に代わる十八カ月の市民義務^{シヴィル・サービス}があります。

昨日^はくは軍事法廷に出て、申し出た理由が受けいられました。だから軍隊にはもう二、三日しかないでしょう。でも、^はくは自由になったわけじゃないんです。シヴィル・サーヴィスの十八カ月間、国家に拘束されるのですから。

モスクワ到着前夜のサヨナラ・パーティーでイギリス人たちがしていたように、モスクワ駅で「アンブラセ」したかったのに、恥ずかしくてできませんでした。今ならできるかも知れない。

*良心的兵役拒否

ドイツは徴兵制と志願制を併用しているが、基本法(憲法)に相当で良心的兵役拒否を認めている。兵役を拒否する申請書を提出し、認められれば民間の福祉施設や病院で代替勤務^{シヴィル・サーヴィス}をすることができ、一九六八年には、兵役拒否申請者が激増し、前年の倍の一万一九五二件に達した(八九年の申請は史上最高の七万七四〇〇)。七〇年の兵役適齢層の総数三八万二二〇〇のうち、代替勤務を選択した者五三〇〇人(一・四%)、七〇年七月現在のシヴィル・サーヴィス従事者の総数(連邦政府所管)は三万七八〇〇。兵役期間は、七一年一〇月まで一八ヵ月、九〇年十一月まで一五ヵ月、以降一二ヵ月に短縮されている。

でも今この瞬間に、われわれが会うことは不可能です。身のまわりのものを鞆につめて日本に行けばできるでしょうが、そんな勇氣はありません。ポリスに捕まれば牢屋ジェイルに放りこまれてしまいます。とにかく今は、まず与えられた義務を果たすより他ありません。そのうちきっと、ベルリンか東京でもう一度会えると信じています。

今の状況をすべて書きました。あまりいい状況ではありませんが、手紙を待っています。

七〇・一〇・一七 ビーレフェルト

信じられないくらいすぐに手紙がきたので、とてもうれしく思いました。

前にもいったように、兵役義務を拒否しました。拒否の理由が受けいれたのです。だから今はもう軍隊にいません。また家に戻っています。三週間か四週間してから(多分そうだと思うけれど、はっきりしたことはわからない)兵役義務に代わるシヴィル・サーヴィス(福祉施設での労働)をすることになると思います。おそらく一九七二年三月の終わりまで。

とにかく、あと十八ヵ月、病人とか老人を助ける仕事をしなくてはなりません。どんなサーヴィスも好きではないけれど、あの無益な軍事訓練よりは少しは役に立つ仕事だと思っています。シ

ヴィル・サーヴィスが実際どんな仕事までふくむのか、ぼくがどんな仕事をするのか、具体的にまだわかりませんが、病人を助ける仕事なら精神病者の家のようなところで働けたらと思っています。以前から精神障害のひとたちには興味があり、そういうところで働けば、なにかを学べるんじゃないかと思うんです。精神に障害のあるひとたちはとても知的で、異なったやり方で世界を見ていて、普通のひとよりほとんど芸術家に近いんじゃないでしょうか。偉大な芸術家たちの多くは、精神がおかしくなっていますよね。それで、精神に障害をもつのはたいした経験のようについて、短期間ならそうなってみたいと思ったりするくらいです。でも、これまたぼくの馬鹿らしい夢想のひとつで、現実性がまったくありません。ぼくはいつもこうして現実からずれていくんです。

それはそれとして、次の旅の計画がもうふくらんでいます。北ヨーロッパの気候は耐えがたいですし、次の日になにをするかが確実に決められているような生活はうんざりです。場所と同じ、仕事も同じ、そして人間も同じ。十八ヵ月の拘束期間が過ぎれば、ここから出てどこかへ行きたいと痛切に思います。

家に帰ってからは、たいいてい自分の部屋にこもって本を読むか、音楽を聞くか、煙草を喫いながら夢想しているかです。夢想のひとつが、あなたと喋っていることです。ぼくは、この夢想が

現実になってほしいのです。なるべく早く手紙をください。



Eが目の前にいる、ということがわたしを非現実的な気分にします。しかしわたしを現実に戻すのは、目の前のEが「あの時のE」ではないからです。わたしは自分のことを「棚にあげて」Eを見ています。わたしだって、Eにとって「あの時のA子」でないのは当然です。それなのに、Eの外見が「あの時のE」でないことが腹立たしくて仕方ないのです。これは理不尽というよりもチャクチャです。わたしは「時間」に対して勝目のない喧嘩をふっかけようとしているのです。

「昨日×××ハウスからユースホステルに移ったから」といってEは電話番号を書いた紙きれをくれました。そのユースホステルは一泊千円だそうです、タイでなら五百円で泊まるので、それでも高いとEはいいいます。

「日本料理は今まで食べたことがない」というEは、刺身を口に運ぶわたしを見て顔をしかめ、「あ、カニバリズム」といい、すぐに冗談だと笑いました。「カニバリズム？ やめて、せっかくおいしいもの食べているのに」とわたしも笑いましたが、それはショックをまぎらわせるため